

シノプシス

1. 概要

原書名：The Cats Who Crossed Over from Paris(Inca Cat Series Book 1)

仮邦題：パリからきた猫たち（猫のインカシリーズ第一作）

著者：R. F. Kristi

出版社：BookBaby（2016年7月20日出版）

ASIN 番号：B01I5AITA6

原語：英語

分野：児童書・動物

総頁数：本文 130 ページ

2. 著者略歴

R. F. Kristi はフランス在住の作家。「Inca Cat Series」第1作目『The Cats Who Crossed Over from Paris（パリからきた猫たち）』がアマゾンのキンドル版にて好評発売中である。シリーズ2冊目となる『Christmas Cats: Inca Book Series, Volume Two (Inca Cat Series 2)』も2016年11月17日にアマゾンのキンドル版にて発売されている。

3. 本書の概略

かわいい猫たちが活躍する探偵物語である。物語は、猫たちが飼い主のミッシーとともにパリからロンドンに引っ越すところから始まる。そして引っ越し先のパリで出会った探偵を補佐する猫や犬たちと一緒に、人間に起こった事件の解決に奔走する。形式の特徴としては、全編を通して物語を語るのが猫のインカであるという点だ。すべては猫の視点から、活躍する動物たちの姿がその心情も含めて生き生きと描かれている。もちろん実際に事件を解決するのは探偵や警察の人間であるが、猫や犬が人間を助け、事件だけでなく、人間関係の問題をも解決していく過程が、猫による軽快な語り口調で丁寧に描かれている。猫の生態や心情についての記述も多々あり、動物（特に猫）が登場する探偵物語としては異色の物語であろう。また、愛あり、笑いあり、ハラハラドキドキの場面ありで、動物好きの子供の読者はもちろん、大人でも十分楽しめる内容となっている。本書はシリーズの第一作であり、続編の翻訳出版も期待される。

4. 目次

第一章：引っ越しですって？

第二章：なじみの友だちに別れを告げて

- 第三章：海を渡る
- 第四章：面白いことになってきた
- 第五章：なんだか臭う
- 第六章：グランド・オープン
- 第七章：行方不明！
- 第八章：すべてがゴロペキ（完ペキ）

5. 内容

第一章 引っ越しですって？

この始まりは、六月のある晴れた日の朝のこと。わたしの名前はインカ。サイベリアンの猫だ。チーズマニアの弟猫のフロマージュと、青い目をした美しいシャム猫のカーラと一緒に、パリにある小粋だけれど少々手狭なアパートに住んでいる。

その朝、わたしたちの『しもべ』（実際は飼い主）のミッシーが友人のジェネビーブとジャックに「引っ越しをする」と話しているのが聞こえてきた。ミッシーがわたしたちを置いていくことはあり得ないのだから、当然わたしたちも引っ越すのだ！ わたしがフロマージュとカーラに、「引っ越しよ！ わたしたち、パリを離れるの！」と教えると、フロマージュは、「そんなことできないよ。フランス産のチーズが食べられなくなったらどうするのさ？」と怒り出した。気の弱いカーラはオロオロしている。

ミッシーと共同経営者のジェネビーブとジャックは、わたしたちの住むアパートからそう遠くない、パリの第七地区にあるブルドネ通りで、小さいながらも素敵なチーズショップを営んでいる。フロマージュはミッシーの自転車の前かごに乗って、そのチーズショップにお出かけするのが大のお気に入りだ。このチーズショップは、いろいろな種類のフランス産チーズが手に入ることでパリでも有名なお店である。この店で生まれたフロマージュは、前のオーナーや、前のオーナーと一緒に引っ越してしまったパパとママから、チーズのことをたくさん学んだ。

「ママ、つまりミッシーを置いていくことなんてできないわ」と、わたしたちだけでロンドンへ行くと勘違いしたカーラが言う。生後まだ2カ月ぐらいのころにこの家にやってきたカーラにとってミッシーはママのような存在で、夜はミッシーのベッドと一緒に寝ないと眠れない。机の上にあるフローレンス叔母さんの手紙にはこう書いてあった。『親愛なるミッシー、あなたとかわいい猫ちゃんたちにちょうどいい家があります。ノーマン叔父さんがあなたに残してくれたこの家をあなたに返すべきときが来ました。ぜひロンドンにいらして。お気に入りの家具もそのままにしてあるから、きっと気に入ると思います。わ

たしはフランスの実家に戻ります。でも年に二回はあなたとかわいいインカとカーラとフロマージュに会いに行くつもりです。』フローレンス叔母さんは、ミッシーの母親の弟であるノーマン叔父さんと結婚した優しく可愛らしいフランス人女性だ。

カーラは、自分たちをロンドンに送らないようミッシーを説得してほしいとわたしに頼んだ。なぜならわたしには人間とテレパシーで話ができる力があるから。大人になるにつれ、わたしは人間と心と心で会話したり、人間の心を読んだりする力を持つようになった。わたしも、セーヌ河を見下ろすこの居心地のいいアパートを引っ越すのはイヤだし、なじみの友だちやお隣さんたちとお別れもしたくない。そこでわたしは、今晚、ミッシーが帰ってきて、お気に入りのテレビ番組『ドクター・ハウス』を見終わったら、ミッシーの心を読みみようと思った。

ミッシーは金髪の巻き毛に明るく茶色い目をした女性で、アメリカ人の父とイギリス人の母との間に生まれたハーフである。幼いころ、飛行機事故で両親を亡くし、ノーマン叔父さんに育てられたので、残念ながらわたしたちがミッシーのパパとママに会ったことはない。その日の夕食後、ミッシーはいつものようにカーラとヨガをして、その後唐突にこう言った。「インカ、カーラ、フロマージュ、わたしたち、ロンドンに引っ越すの！ ノーマン叔父さんがわたしに残してくれたケンジントンのお家にね。広いお庭もあるわ。ご近所さんには、有名な探偵のソロ氏のひ孫さんがいるそうよ。それからジャックとジェネビーブとわたしで、ロンドンにチーズショップの2店舗目を開くの。」こうしてわたしたちは、パリを後にしてロンドンに引っ越すことになった。

第二章 なじみの友だちに別れを告げて

出発の日が近づいたある日、わたしたちは、フロマージュの大親友であるハムスターのシャーロットや猫会議のなじみの友だちたちにお別れを言うため、屋根伝いの道を歩いた。シャーロットが飼われている高校の屋上で、月一回のペースで猫会議は開かれる。フロマージュがシャーロットと出会ったのは、フロマージュがミッシーに引き取られたころだ。出会ってすぐフロマージュの親友になったシャーロットは、聞き上手で、チーズについて熱く語るフロマージュの話の話をいつもニコニコ聞いている。猫会議には、フロマージュが9カ月、カーラが1歳ぐらい、わたしが1歳半ぐらいのころから、みんなで参加している。会長は、犬と勇敢に戦ったことがあると誉高い雄猫のアマドルだ。わたしたちは、見た目もうるわしく、ミッシーのおかげで身だしなみも着こなしも完ぺきなので、最初のころは猫会議のみんなに興味深げにじろじろ見られたものだ。

フロマージュに会いに行くと、いつものように檻の中で忙しくランニングし

ていた。ロンドンへ引っ越すこと、いつパリに戻ってくるかわからないことを報告すると、思いがけないことに、シャーロットもわたしたちと一緒にロンドンへ行くことに決めた！ もうさみしくない、みんな一緒だ。シャーロットをこっそり忍ばせて、ロンドンに着いてから、新しい家族として受け入れてもらうようミッシェを説得すればいい、とわたしたちは決めた。

第三章 海を渡る

引っ越しの日はあるという間にやってきた。わたしたちはジャックが運転するミニバスでフェリーに乗り込み、ロンドンへ到着した。ロンドンの建物はフランスと違って立派だが、フランスの建物のような繊細さに欠けている。新居のあるケンジントンにはすぐに着いた。わたしたちは新居をとて気に入った。わらぶき屋根に真新しい白壁の三階建ての家。そして青々としたプライベートガーデン！

カーラとわたしがミッシェのお手伝いをしていると、いつの間にかフロマージュは、お隣のソロ氏の邸宅に行き、ロシアブルーのモンクと仲良くなっていた。「女の子たちもモンクに会いにおいでよ。モンクはソロ氏の探偵の仕事を手伝っているんだ。すごいよね！」そこでわたしたちは、ミッシェを心配させないように、その日の夜中にソロ氏とモンクの家を訪問し、相棒の犬のテレンスを紹介してもらう約束をした。テレンスの飼い主はコックのホップズで、ソロ氏とモンクは、ホップズとテレンスを家族のように思っているという。

家に戻ったわたしたちは、屋根裏に隠れていたシャーロットをミッシェに紹介した。夕食の間に、シャーロットを気に入るよう、わたしがミッシェにテレパシーを送っておいたおかげか、ピンクのスカーフでおめかししたシャーロットをミッシェはすぐに気に入った。こうしてシャーロットはめでたく我が家の一員になった。

真夜中、わたしたちはベッドを抜け出し、モンクの家へ。モンクは大きな家の裏側にある図書室と呼ばれる大きな部屋にわたしたちを案内した。モンクは、「女の子たちとフロマージュさえよければ、テレンスとぼくが真夜中にここで（ソロとホップズが関わっている）事件のことを話し合うとき、参加してくれてかまわない」と軽い調子で言った。モンクはフロマージュを真似て、すでにわたしたちのことを「女の子」と呼んでいる。

しばらくすると、金色の毛をなびかせたテレンスがやってきた。テレンスは、大きくて力強く自信に満ちあふれたゴールデンレトリバーの犬だ。最高の相棒だ、とモンクはテレンスのことを紹介した。テレンスは、「今日は誰がソロに会いに来たと思う？」と話し始めた。「ご近所に住むコンチータおばあさんが、ペキニーズ犬のポーロを連れて来た。かわいそうにポーロもおばあさんもぶるぶ

る震えてね。おばあさんの大事なダイヤモンドのネックレスが無くなったらしい。ポーロはそのとき一人で家にいたから、責任を感じている。ぼくはポーロに、モンクが事件を解決してくれると請け負った。」とテレンスが言った。ここケンジントン界限で、モンクの探偵としての地位は確立されているようだ。わたしたちは、モンクたちと一緒におばあさんの家を調べに行くことになった。ただし気の小さいカーラだけは、家にいてミッシーの見張り役だ。

第四章 面白いことになってきた

次の日、わたしたちは、ミッシーと一緒に新しいチーズショップを訪れた。お店のオープンは一週間後の予定だ。賢いビジネスマンでもあるミッシーは、ここでロンドンでは売っていないフランス産のチーズを扱い、おしゃれでユニークなチーズショップ兼カフェを営むつもりなのだ。そしてチーズマニアのプロマージュにもお店のマスコットとして一役買ってもらうつもりらしい。なんとってお店の名前が『プロマージュと仲間たち』に決まったのだから。

そして真夜中、わたしたちはまたモンクの図書室へ。モンクたちについて、おばあさんの家に忍び込んだわたしたちは、モンクの家と同じくらい大きいその家を調べ始めた。家具はどれも素晴らしいが、長く掃除された後がなく、どこもほこりだらけだった。昔はたくさんのお客の笑い声がこの家を満たしていたそうだが、今のおばあさんは二階の部屋にこもってほとんど動かないらしい。

ポーロが事件の日のことを説明した。「その日はおばあさんが弁護士さんを訪問することになっていた。その前の日に、銀行の貸金庫に預けていたダイヤモンドのネックレスを取りに行くために、運転手のバンクスがぼくらを車で銀行まで連れて行った。おばあさんはほとんど外出しないから、ネックレスを使うことはほとんどないけど、大事な友だちが主催するイベントに出席するために頑張っておしゃれしようとしたのだと思う。事件の日、バンクスが、弁護士のオフィスはペット禁止だから、ぼくは家にいて宝石のボディガードをもらったら、と言ったんだ。それでぼくは留守番をして、3時間ぐらいしたらバンクスとおばあさんが帰ってきた。その後、化粧室の引出しを開けたら、ダイヤモンドのネックレスがなくなっていた。警察が来て、侵入者の形跡を調べると、鍵を閉めて出掛けたはずの裏口のドアが開いていた。警察は僕を見て『役立たずのちび犬だな』って・・・。」ポーロはがっくりと頭を下げた。「でも誰も家には侵入しなかった。もし誰かが入って来たらぼくにだって分かる。テレンス、きみのように守ることはできないけど、少なくとも吠えてきみたちに助けを求めることはできる。」「確かにそうだ。」とモンクが言った。モンク家のガレージとおばあさん家のガレージは隣同士にある。「しかしポーロ、きみは事件のことをボスにも話しておかなければならない。インカ、きみたち猫はボスには十分

注意してくれ。」「ボスってだれなの？」とわたしが聞いた。「ボスは、通りの4軒向こうの家に住むロットワイラー犬だ。ボスは黒い大きな犬で、優秀なガード犬だが、冷たくて偉そうなやつだとすぐに分かる。ボスは小さい生き物、特に猫が嫌いだ。きみたちはなるべくボスを避けたほうがいい。ボスを見かけたら、一目散に逃げろ。カーラにもそう言うとおいてくれ。」とテレンスが言った。フロマージュは、「ぼくは誰とでも戦うよ。ボスのほうが、ぼくのことを恐れるようになるさ。向こうが気を付けたほうがいい。」と息巻いて、ポーロを驚かせた。

第五章 なんだか臭う

次の日、わたしたちはお留守番だったが、ミッシーは午後に戻ってきて、わたしを新しい美容院に連れて行ってくれた。カーラとフロマージュはミッシーに毛と爪のお手入れをしてもらった。明日は、新聞の取材と写真撮影の予定だ。

わたしたちはまた夜中に抜け出し、図書室でモンクとテレンスに合流した。この日はシャーロットも連れて行ったが、モンクたちはシャーロットのことも紳士的に歓迎してくれた。わたしは、おばあさんのことを教えてほしいとテレンスに言った。あのほこりだらけの家を見て、わたしはネックレスが無くなったのはお金に困ったおばあさんの自作自演ではないかと疑っていたからだ。

コンチータおばあさんは、そう遠くない昔、やさしく自信に満ちた有名なオペラ歌手だった。けれど愛する旦那さんが、夢だったエベレスト登山に出掛けて帰らぬ人になって以来、すっかり力を落とし、家でふさぎこむようになった。今では昔の面影もないおばあさんのことを、ポーロはとても心配し、新しい人生をおばあさんと一緒に始めたいと切に願っている。それを聞いたわたしは、自分の考えを伝えるべきか悩んだが、その前にフロマージュが、「インカはおばあさんが自分でネックレスを隠したんじゃないかって言っていたね」とぼらしてしまった。モンクは、「インカ、きみは観察力が鋭いね。ソロも同じことを考えたそうさ。経済状態が苦しいおばあさんが、保険金目的で自分でネックレスを盗んだんじゃないかって。しかし、亡くなった旦那さんは大金持ちだったし、おばあさんは今でも裕福だ。ダイヤモンドは100万ポンドもするものだからね。」と言った。

その後、フロマージュがモンクからチェスを習った。シャーロットは、高校の生徒がやっているのを見ていたから、チェスのやり方を知っている、と言ってわたしたちを驚かせた。それでモンクにいつも負けているテレンス対シャーロットの一戦が行われたが、結果はなんと、シャーロットがチェックメイト！そのとき、わたしに1つのアイデアが浮かんだ。「おばあさんとポーロをミッシーに引き合わせてみたらどうかしら？」

ミッシーとわたしたちが素敵な家族写真を撮ってもらった日から2日後、わたしたちはソロ氏と初めてお目見えした。ソロ氏は背が高く、少し長い黒髪の男性だ。一見すると友好的だが、性格は内向的で、孤独と独立心を大事にしているようにわたしには思える。ソロ氏の友人のレイド警部補は、こちらも背が高く、痩せ気味で、茶色い髪をしていて、キセルが手放せないようだ。年齢は2人とも30代後半ぐらいか。ホップズ氏も背が高く、40代初めぐらいの厳格そうな感じの人だ。その後、ポーロにシャーロットを紹介すると、聞き上手なシャーロットとポーロは意気投合し、まるで古くからの友人のように仲良くなった。これにはフロマージュは少し面白くないようだ。

そのとき、外で電話の音が聞こえたので見に行くと、ガレージでバンクスが話していた。「ああ、今ドアを開ける。すべては元通りだ。婦人は睡眠剤でぐっすり寝ているからね、わたしのことなど必要としてないよ。」これを聞いたモンクがポーロに、「バンクスを訪ねて来るお友だちがいるのかい？」と聞くと、「おばあさんのネイリストのポーリーです。数か月前からバンクスと仲良くなったようです。でもおばあさんはバカな話ばかりする彼女をあまり好いていません。」と答えた。バンクスは裏口のドアを開けると、赤い髪に派手な口紅を塗った女を家に招いた。モンクはポーロに、「翌日の晩にまた来る」と言った。わたしは、モンクがバンクスを調べに行くつもりだとピンときた。そしてモンクの計画を見届けるために、わたしもモンクに付いていこうと心に決めた。フロマージュやカーラを危険な目に合わせたくないの、今回は二人に内緒で行くつもりだ。

第六章 グランド・オープン

次の日は、チーズショップ『フロマージュと仲間たち』のグランド・オープンの日だ。家中が期待と興奮に包まれている。わたしたちはシャーロットを残してミッシーとお店に向かった。お店にはたくさんのフランス産チーズが並べられ、カフェスペースにはお客様を迎える準備が整った。午前8時にドアを開くと、お客様が列をなしている。なんてすばらしいの！ 午後、わたしたちは邪魔にならないように地下室で遊び、予定通り、午後5時半にお店を閉めた。ジェネビーブは、「フロマージュとインカとカーラは、お客さんを引きつける磁石のようだ。午後から来たお客さんはみんな、新聞で見た猫たちに会えるのかって聞いてきたよ。」と言って喜んだ。

大成功のオープン初日を終えた日の夜、わたしは一人でベッドを抜け出した。モンクを追っておばあさんの家に忍び込むと、おばあさんが普段食事をとっている二階の居間からピアノの音が聞こえてきた。居間では驚いたことに、おばあさんがピアノの前で美しいソプラノの歌声を響かせていた。ピアノ上にはポ

一口が座って、おばあさんをうっとり見つめている。わたしが部屋に入ると、おばあさんは驚いたが、わたしの頭を優しくなでてくれた。わたしはおばさんの膝に乗り、ポーロがおばあさんを愛し、必要としていることをテレパシーで伝えた。すると、「可愛いポーロ。わたしが引きこもっていることであなたが悲しんでいるのは知っているわ。元の生活に戻るよう努力しなくちゃね。明日からまた公園へのお散歩を始めましょうか。」とおばあさんが言った。わたしはまたおばあさんの目を見つめ、おばあさんが我が家に来てミッシーに自己紹介してくれますようにとメッセージを送った。すると魔法がかかったように、「可愛い猫ちゃん、あなたはフローレンスが住んでいたお家の新しい住人ね。新しいご近所さんにご挨拶にいかなくてはね。」とおばあさんが言った。わたしはおばあさんのことを疑っていたことを恥ずかしく思った。おばあさんは本当に優しくいい人だ。

そのとき突然、一階から大きな物音が聞こえた。ポーロが一階へ駆け出していく。どこからかモンクも現れた。おばあさんはわたしを抱いたまま心配げに一階へ向かう。あの音はフロマージュの鳴き声だ、とわたしには分かった。一階の台所では、高級なチーズや割れたお皿が散らばっていた。すると物陰からカーラがそろそろ出てきた。それからバンクスが、まるで今起きたばかりのようにあくびをしながら部屋から出てきた。「なんてこった、クリスマス用に大事に熟成させていたチーズが台無しだ。こいつら追っ払ってやる」とバンクスが言った。バンクスは30代初めぐらいの大きな雄牛のような男で、あまり好きになれそうもない。バンクスは亡くなった旦那さんのボディガードをしていたが、旦那さんが亡くなった後も運転手兼お手伝いとしておばあさんの家にとどまっているようだ。「バンクス、なんてくだらないことを言うの。たかがチーズじゃない。ポーロが新しいお友だちをたくさん連れてきてくれてわたしは嬉しいの。さあ、ここを片付けてちょうだい」とおばあさんが言った。バンクスはわたしたちをギロリとにらんだが、何も言わずに片付け始めた。

帰り道、震えて泣きじゃくっていたカーラが、話し始めた。「インカ、あなたが夜出かけて行ってなかなか帰ってこないから、フロマージュとわたしは心配になって探しに行ったの。そしておばあさん家の台所を通ったときに、フロマージュが食糧庫の中にチーズを見つけて、棚に飛び乗った。わたしはダメだって言ったけれど、ぼくはプロのチーズマニアだから、新しいチーズを試さないわけにはいかないだろうって…。それで陶器のお皿に乗っていた大きなチーズを味見しようと首を突っ込んだら、そのままお皿ごと落ちたの。物音を聞き付けたバンクスが部屋から飛び出てきて、フロマージュの首根っこをつかんだ。そのときフロマージュの首にネックレスが巻き付いていたわ。バンクスはネックレスをつかんでパジャマのポケットに入れた。それから玄関から表通りにフ

フロマージュを投げ捨てた。フロマージュが大きな鳴き声をあげたのはそのときよ。わたしはずっとここで隠れて見ていたの。」

モンクとわたしは顔を見合わせた。ネックレスを盗んだのはバンクスだったのだ。それにしてもフロマージュはどこへいったのだろうか？ ロンドンに着いたばかりのフロマージュは表通りの道などわからないはず。暗い顔のわたしにモンクは、「ぼくたちは理性的にすばやく行動しなければならない。ぼくはテレンスを連れてソロを起こしに行く。きみはミッシーにフロマージュとネックレスのことを伝えて、ソロの家にミッシーを連れて来ておくれ」と言った。モンクはわたしのテレパシーの力を知っていた。きっとおしゃべりのフロマージュが話したのだろう。

家に戻ったわたしは、寝ているミッシーの上に飛び乗って、ミッシーを乱暴に起こした。そして、事件のことやフロマージュがいなくなったことを大急ぎで何度もミッシーに伝えた。するとミッシーは、ソロ氏の家に駆けだしていった。一方、モンクとテレンスにたたき起こされたソロ氏は、ホップズに電話をかけた。彼らは長年の経験でテレンスが何か大事なニュースを持ってきたことをわかっていた。そしてソロ氏とミッシーが初対面を果たす。ミッシーはわたしが伝えた通りのことをソロ氏に伝え、「どうか助けてください」と泣いた。ソロ氏はホップズに向かって、「ホップズ、レイド警部補にすぐ電話を。ネックレスを盗んだ犯人はバンクスだ。わたしはテレンスとミッシーと一緒にフロマージュを探しに行く。モンク、お前はこの可愛い猫たちと一緒にバンクスが逃げないよう見張っていてくれ」と言った。

おばあさんの家に戻ったモンクとポーロとカーラとわたしは、真っ暗な中、モンクスの部屋を見張った。こんな経験は生れて初めてだ！ しばらくしてバンクスが、誰もいないことを確かめながら部屋から出てきた。警察が来る前にダイヤモンドを持って車で逃げるつもりらしい。しかし、ソロ氏はそれを読んでいた。ホップズはソロ氏の指示でガレージの前を塞ぐように車を止めていたのだ。慌てたバンクスは車を降りて、裏口から逃げ出そうとしたが、モンクがバンクスを猛然と追いかけて、押し倒す。なんてすごい！ バンクスは警察に連行された。それにしてもフロマージュはいったいどこへ？

第七章 行方不明！

フロマージュのことを心配しながら待っていると、暗闇を裂くようにテレンスが走ってきた。「女の子たち、安心してくれ。フロマージュを見つけた。けがない。ミッシーが家に連れ帰って、ベッドに寝かせたよ。きみたちも帰った方がいい。話は明日にしよう」ああよかった！ その夜はわたしも、ミッシーとカーラのベッドと一緒に眠った。

次の日の朝、ミッシーはいつものようにチーズショップに出掛けた。わたしたちが日の当たる台所でのんびりしていると、午前11時ごろにテレンスとポーロとモンクが会いに来てくれた。テレンスが、「どこか痛んだりしていないかい」と聞くと、フロマージュは、「大丈夫。ちょっと怖かったけどね」と答えた。そしてイギリス産チーズとフランス産チーズの違いを嬉しそうに話し始めたので、わたしたちは笑わずにいられなかった。

モンクは昨夜のことをこう説明した。バンクスはカバンの中にダイヤモンドを隠し持っていて、窃盗の現行犯で逮捕された。まもなく刑務所行きだろう。レイド警部補とソロ氏が、おばあさんに事件のことを伝えた。おばあさんはバンクスが犯人と聞いてたいそう驚いたそうだ。そしてネックレスは無事、貸金庫に戻された。事件の日、バンクスは、ポーロの夕飯に睡眠剤を混ぜて寝かせ、共犯者を裏口から家に侵入させたいらしい。共犯者はネックレスを盗み出した後、バンクスがあらかじめ穴を開けておいた大きなチーズの中にネックレスを隠した。そして共犯者は裏口から逃げた。わずか10分ほどの出来事だったらしい。共犯者はネイリストのポーリーだ。そしてフロマージュは、「ぼくが表通りに放り出されたとき、どんなに驚いたと思う？ 通りの外に出たことなんて一度もないからさ。でも通りを歩いていたら、見覚えのあるドアを見つけた。テレンスの匂いもしたから、間違いない。それで朝にはテレンスがホップズと一緒に出てくるだろうと思ってそこで座っていたけれど、突然、ボスのことを思い出したんだ。ボスの朝の散歩に出くわしたらまずいと思って、それで通りを渡って公園まで行って隠れた。公園でミッシーの声が聞こえて、ミッシーの腕に抱かれたとき、どれほどぼくが安堵したかわかる？」と言った。

第八章 すべてがゴロペキ（完ペキ）！

太陽がサンサンと輝く夏のある日、わたしたちはみんな、ソロ氏の家の大きな庭の芝生に座っていた。長いテーブルの上には、フランス料理とイギリス料理のごちそうが並ぶ。ピクニックを主催したのはおばあさんだ。バンクスがいなくなった後、ホップズがすぐに、おばあさんの世話をしてくれる優しい中年夫婦を見つけた。ミッシーとおばあさんの交流も続いている。わたしたちもおばあさんの家にしょっちゅう遊びに行く。

今、おばあさんは大きなサングラスをして、ガーデンチェアにゆったりと座り、ミッシーとジャックが新しいお店のことで議論しているのをほほ笑みながら聞いている。レイド警部補も話に加わって、カフェショップについてアドバイスをしていた。シャーロットは日陰になったパラソルの下にちょこんと座っている。わたしは、「なんてすごい冒険をしたのかしら！ わたしたちを仲間に入れてくれてありがとう。パリにいたときはこんな素敵なことが待っているな

んて思いもしなかったわ。」とモンクにお礼を言った。するとモンクは、「ぼくは一度パリに行ってみたいと思っている。そのときはケンジントンの猫会議にぼくを出席させてくれないか。」と言った。「もちろん大歓迎よ。それにこれからも、ソロとあなたを助けながら、たくさんのミステリーを解決していきたいわ。」

この先また新しい事件が待っていることだろう。けれど今のところ、人生はゴロペキ（完ぺき）ね！

6. 本書の特徴

文体：普通。使用されている単語はやや難しめ。

訳の難易度：正確かつスピーディに訳すためには、本書全体に渡って登場する猫や犬にまつわる固有名詞や用語についての背景知識がある程度必要である。それを踏まえて、子ども向けの物語なので、難しい言葉を極力避けて、読みやすい文体を心掛ける必要がある。主役の猫や犬たちのそれぞれのキャラクターが素敵なので、それを生かした訳し分けも大事になってくると思う。

分析・感想

子ども向けの作品であるが、猫や犬、ハムスターなどたくさん出てくる動物たちや人間たちのキャラクター設定がしっかりしているので、物語の世界にいつの間にか自然に惹き込まれていった。話のテンポも良く、展開も早いので、あっという間に最後まで読めた。主な対象読者としては6歳から12歳ぐらいまでの小学生（特に6歳から9歳ぐらいの小学校低学年）が想定できるが、大人でも十分に楽しめる作品である。猫が登場する探偵もの、というと赤川次郎の『三毛猫シリーズ』などが思い浮かんでいたが、この物語はそういった猫が脇役で登場するようなお話とは全く違っていた。あくまで猫たちが主役で、最初から最後まで猫たちの目線で物語が描かれている。そうかと言って猫が不自然に擬人化されているわけでもなく、あくまで動物と人間という普通の関係の中で、とても自然に物語が語られている。このような動物目線の探偵の物語は、これまでありそうでなかったような気がする。ある意味とても新鮮だった。猫や犬の生態や心情がたくさん描かれているので、猫好き、犬好きの読者にはもちろん興味深いだろうし、そうでない読者にとっても、新鮮な楽しさを持って受け入れられるのではないか。また、最近では日本でも、猫の人气が高まっていて、ペットとして猫を選ぶ人も多いと言う（2017年の調査では、犬と猫の飼育数の差がほとんどなくなったそう）。雑誌などで猫特集が組まれたり、かわいい猫の写真集が販売されたり、猫を扱った書籍の出版も増えている。猫は、

人間に忠実な犬に比べてミステリアスな部分が多く、擬人化してそこに人格を見出すことができる部分に魅かれる人が多いのではないとも言われている。本書はまさにそのような需要に答えることができる作品であろう。猫ブームに乗って、本書が爆発的な人気を得る可能性もある。また、パリやロンドンを舞台としているところも（憧れを持つ日本人も多いので）興味を持ってもらえる要素の一つと言える。シリーズの第一作目であるので、登場する動物の外見や性格についての説明がやや詳しく感じられるが、生き生きと活躍を始めた個性豊かな猫や犬たちが、この先どんな風に暮らしていくのか、また難事件を解決することができるのか、二作目以降も早く読んでみたい気持ちにもなるだろう。日本ではこの著者の訳書はまだ出版されていないので、シリーズものとして日本でもファンを増やしていけるのではと期待が持てる作品である。

以上